

### <論文> 『おもろさうし』 にみられるおなり神像

鍋倉, 由記子 / ナベクラ, ユキコ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

89

(発行年 / Year)

1996-07-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019897>

# 『おもろさうし』にみられるおなり神像

鍋倉 由記子

## 一、はじめに

琉球古代社会には多くの固有信仰と言うべきものがあり、沖繩特有の神観念と深く結び付き現在に至っている。それらは例えば、「自然神（シー）、靈力（セヂ・スヘ）、太陽神（てだ、てるかは）、火の神、ニライ・カナイ」等々であり、これらが多大な信仰を集めていたことは、琉球最古の文献であり、この一冊で「万葉・祝詞・古事記の三つに該当する」といわれる『おもろさうし』に数多く見られることからわかる。つまり『おもろさうし』を読むということは、これら固有信仰を含む、いわば『おもろさうし』が作られた当時の人々のものの見方・考え方、琉球古代の思想を知ることなのでないだろうか。

そしてもう一つ忘れてはならない固有信仰がある。柳田国男の『妹の力』にもいわれる「ゑけり（兄弟）からみたおなり（姉妹）がその靈力でゑけりを守護する」というへおなり神信仰である。この

おなり神信仰は先に挙げた信仰の中にも関連性をみることができ、琉球固有信仰の最も基盤となっているものの一つではないかと思われる。もちろんこの信仰も『おもろさうし』に見られ、それどころか『おもろさうし』を読み進め、考えていく上で最も重要で不可欠なものが、それこそこのおなり神信仰だと私は思うのである。

そこでここではおなり神の『おもろさうし』に見られる姿や、『おもろさうし』におけるおなり神信仰の意味・意義を考えていこうと思う。神観念というものは古代の人にとって非常に身近でかつ重要な存在であったに違いない。そういったことも踏まえた上でおなり神の姿を見ていくことにする。

## 二、本論

(一)、おなり（神）とは

まず初めにおなり（神）の外環に触れておく。『沖繩古語大辞典』（角川書店）によると、

・をなり<sup>注(2)</sup>

姉妹。「ゑけり」（兄弟）に対する姉妹の総称。「をなり」は男の側から、「ゑけり」は女の側からの呼称で、一般にをなり、ゑけりは妹、兄が多く用いられる。また、愛人・妻・夫の意にも用いられた。

・をなりがみ

霊力を持つ姉妹神。琉球諸島では、一般に兄弟に対する姉妹の霊的な優位、つまり「ゑけり」に対して「をなり」はその霊力でもって庇護を与えるという信仰がある。古くからの信仰で、「をなり」に神性をみとめ、これを拝むというのではなく、そのセヂ（霊力）にたよるのである。例えば「をなり神」（姉妹の霊）は、旅に出る兄弟を守る働きをすると考えられ、旅行者は姉または妹の毛髪や手巾をお守りとして携行した。また祖先の祭祀、農作物の豊饒・予祝儀礼に姉妹のもつ霊力への信仰が「をなりがみ」（姉妹神）ということばに示されている。

となっている。この説明がおなり神を考えていく上での基本となるので、これを押さえた上で、次に『おもしろさうし』に登場するおなり神を分類してみたい。

『おもしろさうし』全一五五四首中、〈おなり神・おなり御神・おなり按司・おなり君・おなり子も含む〉という言葉が出てくるオモロは一四首、〈ゑけり〉（いせゑけり・いしゑけり・ゑけり按司を含む）は二四首ある。オモロが全部で一五五四首あることを考えると、一四首・二四首というのは少ないように感じられるが、まずは〈おなり〉〈ゑけり〉がどのような形で使われているかを全て書き出してみる。

注(3)

- 一―三一、「いせゑけり按司襲い」「いせゑけり貴み子」
- 一―三三、「いせゑけり按司襲い」「いせゑけり貴み子」
- 一―三四、「いしゑけり按司襲い」「いしゑけり貴み子」
- 三―九一、「いせゑけり按司襲い」
- 三―一〇九、「いせゑけり按司襲い」
- 三―一四九、「いせゑけり按司襲い」
- 四―一九五、「いしゑけり按司襲い」
- 四―二〇三、「いせゑけり按司襲い」
- 五―二二一、「おなり神」
- 五―二八〇、「をなり君」
- 七―三五九、「いせゑけり」
- 七―三八七、「いせゑけり按司襲い」
- 九―四九四、あかおなりかみのふし（節名）
- 九―五〇八、「いせゑけり按司襲い」
- 十―五一八、「いせゑけり按司襲い」「いせゑけり貴み子」
- 十―五二九、「いせゑけり按司襲い」「いせゑけり貴み子」
- 十二―六五四、「いせゑけり按司襲い」
- 十二―七二〇、「いせゑけり按司襲い」
- 十二―七二九、「ゑけり」
- 十二―七三〇、「おなり子」「おなり」
- 十二―七三一、あかおなりかみのふし（節名）
- 十三―七六六、「いせゑけり」
- 十三―七七八、「おなり神」
- 十三―七九二、「おなり神」
- 十三―七九四、「おなり神」

十三―八七六、「いせゑけり按司襲い」「いせゑけり貴み子」  
 十三―八七七、「いしゑけり按司襲い」「いせゑけり貴み子」  
 十三―九二五、「おなり神」  
 十三―九三四、「おなり神」「いしゑけり」  
 十三―九六五、「おなり御神」  
 十四―九九三、「清らゑけり」「ゑけり」  
 十四―九九八、「ゑけり按司」「おなり按司」  
 十四―一〇〇〇、「ゑけり」  
 十四―一〇二六、「おなり神」  
 十六―一一四五、「おなり」「ゑけり」

以上、〈おなり〉〈ゑけり〉の言葉の用いられ方を全て抜き出した  
 が、これらを見るといくつかのことに気付く。

まず第一に、〈ゑけり〉は単独ではなく「いせゑけり按司襲い」「い  
 しゑけり」といった形で用いられることが多い（二四首中二〇首）。  
 また〈おなり〉はというと、一四首中八首が「おなり神」という言  
 葉で使われている。

第二に、〈おなり〉〈ゑけり〉の登場するオモロが収録されている  
 巻を見ていくと、

〈おなり〉	〈ゑけり〉
一卷 三首	一卷 三首
三巻 三首	三巻 三首
四巻 二首	四巻 二首
七巻 二首	七巻 二首
九巻 一首	九巻 一首

十二巻 二首	十巻 二首
十三巻 六首	十二巻 三首
十四巻 二首	十三巻 四首
十六巻 一首	十四巻 三首
	十六巻 一首

計一四首

計二四首

であり、十巻を除いた九巻以降の巻、九・十二・十三・十四・十六  
 巻には〈おなり〉も〈ゑけり〉も見られるのだが、それ以前の巻に  
 は〈おなり〉と〈ゑけり〉が揃って登場することはないことに気付  
 く。

また第三に、各巻多くても二、三首しか見られないのに、十三巻  
 には〈おなり〉が六首、〈ゑけり〉が四首も収録されている。確かに  
 十三巻は二二六首と他の巻に比べてオモロの数が圧倒的に多いが  
 （それ意外では二十一巻の一四首が最高）、〈おなり〉が一首も出て  
 こない巻もあることを考えると、特に〈おなり〉の六首は多いよう  
 に思われる。

以上を踏まえつつ、『おもしろさうし』にみられるおなり神像を探つ  
 ていくために、ここではそれぞれの〈おなり〉が表す意味からこれ  
 らのオモロを以下の三つに分類して考える。

- ①、個人レベルでの〈おなり〉
- ②、村落レベルでの〈おなり〉
- ③、国家レベルでの〈おなり〉

このように分類するのは、おなり神（信仰）の内容や意義がよく  
 わかりやすくなり、『おもしろさうし』そのものの構造も見えてくるの  
 ではないかと思うからである。

(二)、オモロの中のおなり

①個人レベルでのへおなり

一 喜舎場つくり子

喜舎場おなり子や

又 喜 へひ

又 昨夜 見ちやる夢の

真夜中の夢の

又 夢や 跡無もの

夢や 失せ無もの

又 おなり 抱ちへともて

つくり 抱ちへともて

(十二—七三〇)

まず①では、へおなりが「姉妹・恋人」という本来の意味を表すオモロを集める。

このオモロは「第十二 いろいろのあすひおもろ御さうし」に収録されている。普通『おもろさうし』での「あすひ」は「神遊び(神女の舞)」を指すが、この七三〇のオモロにおける「あすひ」は一般的な意味の「遊び」の要素を感じさせる、どこかユーモラスな珍しいオモロである。また『おもろさうし』ではへおなりというと神がなくともおなり神を連想するものだが、ここでのへおなりは内容からみて姉妹・恋人、特に愛する女性の意味だろう。

また、十四—一〇二六と十六—一四五のオモロも①に加えたい。どちらのオモロも「聞多金丸」「勝連しよさく思い加那志」という身分の高い人物を謡っているので、そこに登場するへおなり神へおなりへおなりは一見自分の周辺存在という個人レベルを越えてし

まいそうであるが、ここでは内容から純粋に姉妹・兄弟を表すものと考えられる。

なお沖繩では兄弟姉妹を熟語にするときは「おなり へけり」と女性を先に言う。これは日本語の「妹背(いもせ)<sup>注(4)</sup>」と同様で興味深い。沖繩では「男女・雌雄・夫婦・甥姪・祖父母」までも、それぞれ「winagu-wikiga' mimun-wamun' mitu' mf-wikwa' tafuji」<sup>注(5)</sup>と女性を先に置いており、習慣として深く根付いていたことがわかる。そして、この習慣を支えてきたものがへおなり神信仰だと思えるのである。

②村落レベルでのへおなり

一 おとまこい

あか(ま)こい おかるな

又 おが屋辺より

おわよりな へけり按司

又 といし 出ぢへれ

あしやげ 出ぢへれ おなり按司

又 何だにが 言ぎや

おわにぎや へけり按司

又 世言 せに

世想ぜ せに おなり按司

又 世言 まは

世想ぜ まは へけり按司

又 島 へれい

国 へれい おなり按司

又 島も まは  
 国も まは 糸けり按司  
 又 海幸 糸れ  
 陸幸 糸れ おなり按司  
 又 海幸 まは  
 陸幸 まは 糸けり按司  
 又 玉 糸れい  
 つしや 糸れ おなり按司  
 又 撓わにな  
 やびきやにな 糸けり按司

(十四—九九八)

これは『おもろさうし』にただ一首しかない問答体の珍しいオモロであり、自分の家から出てきた糸けりと神を祀る家におなり、政治を司る糸けりと政治も島も海幸も嫌がるが最後にようやく玉(靈力を持つとされる)を受け入れるおなり、というように兄妹(男女)の役割というものがはっきりと示されている重要なオモロである。つまり、ここにはこのオモロが書かれた古代社会の「おなりは宗教を、糸けりは政治を」という社会構造が見てとれるのである。

ここでの「おなり按司」「糸けり按司」はいわゆる「おなり」(糸けり)の意味——妹兄もしくは愛する男女(ここではどちらにも取れる)——を表わしているが、ここには単なる妹を越えた、神としてのおなりの姿が見えているので、①ではなく、「セヂを持つ、おなり神が登場するオモロ」として②に分類する。

おなりの神としての基本的な役割は、兄・糸けりを守護することであるが、『おもろさうし』にはそこから発展したおなり神の姿も見

られる。例えばおなりは時に、その姿を変えて糸けりを守護する。

すゝなりかふなやれのふし

一 吾がおなり御神の

守らてゝ おわちやむ

やれ 糸け

又 弟おなり御神の

又 綾蝶 成りよわちへ

又 奇せ蝶 成りよわちへ

(十三—九六五)

蝶は古くはただ美しいだけでなく、靈的なものとみられていた。

おなりは糸けりが航海に出る際にはおなり神として、靈力を持つ蝶に姿を変えてまで糸けりとその航海の無事を祈ったのである。

また、鳥になったおなりもみられる。

うさけかふし

一 いけなのよゝ清ら糸けり

愛しやの糸けり

又 いけなの丈清ら糸けり

又 糸けりぎや 首里親国 おわとき

又 糸けりぎや 按司親国 おわとき

又 糸けりぎや 先おらに ならに

又 糸けりが 御鳥に ならに

(十四—九九三)

ここに「おなり」は登場しないが、明らかにおなり神が鳥に姿を変えて糸けりを守護しよう、というオモロである。こんなおなりの姿は琉歌(注6)にも見られる。

御船のたかともにも 白鳥がみちやうん

白鳥やあらぬ おみなり御霊

(白鳥節・読み人しらず)

(訳) 船の高臚に 白鳥がとまっている

いや白鳥ではない おなり神なのだ

これらから、鳥がおなり神を連想させるものとして定着していたことがわかる。男達は妹が兄の旅の、もしくは女性が愛する男性の安全をひたすら祈る姿を、船上で見つけた鳥に重ね合わせていたのだろう。心細い時には力付けられ、そうでなくとも鳥を見つけたら自分のおなり神を思い出し、その航海を縁起の良いものと考えたりしたのではないだろうか。

ちなみに鳥は『おもろさうし』にたびたび登場する。「鷲が舞やい富」(十三一七八七) というように船名としてや、「親御船は 押し浮けて 飛ぶ鳥と 競いして 走りやせ」(十三一八八五)「若子愛しけが御船 飛ぶ鳥る 隼る かに ある」(十三一九一九)と、鳥が飛ぶがごとく船が走るようにと願う中などに登場しており、おなり神が船の安全を祈る場合と、船が速く走ることを期待する場合、それぞれの場合によって鳥の種類は異なるものの、琉球社会では船と鳥とは切っても切れない間柄だったようである。

話を おなり神に戻そう。「(一)、おなり(神)とは」で私は十三巻にはへおなりへの登場するオモロが多いことを述べた。すでに「第三船多のおもろ御さうし」のオモロをいくつか取り挙げたが、ここでもう少し詳しく見ていこう。

とまりみちへりきうかふし

一 五くの真ころ子よ

浮き清ら 走りやせ

又 太郎子 掻い撫でころ

又 こゑしのは 崇べて

又 おなり神 崇べて

又 東嶽に 上て

又 おほが口 上て

又 良かる木は 選で

又 きやきやる木は 選で

又 本付け縄 縄 付けて

又 山付け縄 縄 付けて

又 すらからの早御船

又 末からの早御船

又 那覇泊 走り合へば

又 親泊 走り合へば

又 百御船の 船先

又 八十御船の 船先

(十三一七九二)

船の進水式でのオモロである。まず船頭を呼びかけ、おなり神であるこゑしの神女を祈り、御嶽に登り、木を選んで縄で引き、船を造り、その船を期待するあるべき姿を祈り予祝している。

一連の作業を順序通りに謡うことが、ただの予祝にとどまらずその通りの結果を招く、と当時の人は信じていたに違いない。ここには『おもろさうし』の持つ宗教的側面が実によく表れており、また何よりも先にまずおなり神であるこゑしの神女を祈っていることから、進水の際だけではなく造船の際にもおなり神がどれだけ影響力

を持っていたかがわかる。

へとのなよせりきよはねうちしちへかふし

一 国の撫でしのが

撫でしのが 船遣れ

和々と

和やけて 走りやせ

又 国の御宣り子が

御宣り子が 船遣れ

又 神や おなり神

ころは いしゑけり

又 嘉津宇嶽 取たもの

蒲葵嶽 取たもの

(十三—九三四)

神女である撫でしのがおなり神として守護するのだから、ゑけりの航海は和やかで穏やかなものになるだろう、と予祝しているオモロである。琉球は海に囲まれており、船や航海は生活上欠くことのできない非常に重要な事であった。その重要な事ばかりを題材にしたオモロを集めた「第十三 船ゑとのおもろ御さうし」に「おなり」が登場するオモロが多数収められているということは、それだけおなりのセヂによる守護が重要視されていたことを物語っているのではないだろうか。

そしてこのオモロにも言えるのだが、「船ゑとのおもろ御さうし」に登場するおなりには、神としてのおなりの守護が行き届く範囲に広がりを感じずにはいられない。例えば、九三四のおなり神にはもうただひたすらにゑけりの無事を祈るだけのおなりの姿はみられな

いように。それは個人レベルで兄妹が互いに役割を分担し合っている

た社会構造が、海に囲まれた琉球社会では最も不可欠で重要だったであろう航海を通して、より社会的レベルに——ここでは村落レベルと言っている——個人レベルを一步抜け出したところまで押し上げられていったということではないか。このことからおなりのセヂやおなり神というものが当時の人々にとっていかに必要とされ、強い影響を与えるものであったかがよくわかるのである。

その他十三巻には七七八、七九四、九二五と「おなり」が登場するオモロがある。内容がよくつかめないものもあるが、どのオモロにもゑけりの航海の安全を祈る姿が見てとれるし、「船ゑと」に収録されていることから、これらも②に分類できると思う。

以上②では十三巻のオモロを中心に、おなりの神としての具体的な霊力を示すものを集めたが、そこには

・「おなり」ではなく「おなり神」が用いられる。

・ゑけりは船に乗るなど行為を司り、おなりは外から祈りゑけりや航海などを守護する。

・おなりは時にはその姿を変えてまで祈る。

といった特徴が見られ、『おもろさうし』が非常に呪術性、宗教性が濃い文献であることを改めて感じさせられる。

③ 国家レベルでの「おなり」

あおりやへかふし

一 おぎやか思いが おこのみ

地離れは 揃へて

歡ゑの門は げらへて

十百末ぎやめも

おぎやか思いしよ

末 勝て ちよわれ

又 按司襲いが おこのみ

又 大君は 崇べて

又 をなり君 崇べて

又 昔よりむ 勝り

又 精の王やれば

(五―二八〇)

五巻は「首里おもろの御さうし」で、いわゆる王府オモロ（首里

王府や国王を讚美するオモロ）を集めた巻である。ここに出てくる

「おぎやか思い」「按司襲い」は他の按司を襲う（支配する）大按司、

すなわち国王（尚真王）のことで、その離島平定と造門という中央

集権化のための行為と国王自身を讚美しているオモロである。（これ

とよく似た内容で、へおなりへの登場するオモロが二二二にある。）

そしておなり神である「大君」は王府に仕える高級神女のこと、

このオモロのように聞得大君を指すことが多い。聞得大君とは琉球

王国における最高神女の称号で、国王のおなり（姉妹）が任命され

た。この尚真王の時代には、国王が中央集権化を目指し政治権力を

自分に集中しようとしたのに対応して、王の妹である聞得大君を筆

頭にそれに続く神女達の組織を整え、王と王権と王国を守護し正当

化する宗教的な力を彼女達に持たせたのである。この、ゑけりであ

る国王が政治を行い、おなりである聞得大君が宗教や祭祀一般を司

る、という対応関係は②でみた社会的構造関係と全く同じなのであ

る。

もう一つオモロを取り挙げる。

きこへ大きみやさはたけおれわちへかふし

一 聞得大君ぎや

てるかはは 宣立て、

按司襲いしよ

天ぎや下 襲ちへ

又 鳴響む精高子が

てるしのは 宣立て、

又 いせゑけり按司襲い

肝が内は 嘆くな

又 いせゑけり貴み子

御肝内は 嘆くな

又 精軍 押し立てば

大君しよ よ知らめ

又 精百 押し立てば

精高子す よ知らめ

又 国持ちのはらはら

おぼつ庭よ 世 揃へて

又 浦寄せのもどろ

神座庭よ 世 添ゑ

又 国かねのはらはら

島は 平らあげて

又 浦治めもどろ

国 広く 添ゑて

又 赤口が 依い憑き

精軍で、撥ねて

「鳴響む精高子」は聞得大君、「てるかは」「てるしの」は太陽神、「いせゑけり按司襲い（貴み子）」は国王のことである。聞得大君が太陽神を祈るからには、国王は天下を支配し給え。立派なゑけりである国王様はご心配なさるな。軍を出すからにはおなりである聞得大君が守護なさるだろう——という戦勝予祝のオモロである。

〈おなり〉という言葉は出てこないもの、おなり神信仰とおなりが宗教・ゑけりが政治（この場合戦）という社会構造が、非常にはつきりとみてとれる。また、聞得大君が祈ることで太陽神や火の神までもが国王を守護することになり、最後には国王を讃美することになっているという、王権強化のためのオモロでもある。

③で取り挙げたオモロの中で、直接〈おなり〉が登場するオモロはわずかに二首しかないが、そこには聞得大君は国王のおなり神そのものであり、おなり神信仰は国の頂点である国家レベルにまでも押し上げられていることがはつきりと確認できる。そうなると『おもしろさうし』には王府オモロの巻が一・三・四・五・六・二十二と六巻もあり、特に一巻・三巻の「きこゑ大きみがおもしろ」「きこゑ大きみがなしおもしろ」の表題からも、聞得大君すなわちおなり神が相当数『おもしろさうし』に謡われていることが想像でき、王府においてもおなり神がどれだけ重要な存在であったかが覗い知れるのである。

### 三、まとめ

『おもしろさうし』にみられるおなり（神）像を探ろうと三つの分

類をみてきたが、そろそろまとめに入ることにする。

まず①の「個人レベルでの〈おなり〉」から、『おもしろさうし』では本来の「妹・愛人」の意味で〈おなり〉が謡われることは少ないことがわかる。それは『おもしろさうし』が王府の祭式のための神歌集として王権を強化するために編纂された古謡集であるため、「妹・愛人」を謡うことがもともと少なかったからであろう。ついでに、〈おなり〉が「愛する人」を表す可能性もあるのに『おもしろさうし』には恋のオモロはほとんどない。『おもしろさうし』は『万葉集』の要素を含むとされ、「おなり ゑけり」の言い方は日本古語の「妹背」と比較されるけれども、

後れゐて恋ひつつあらずは

紀伊国の妹背の山にあらしものを

（万葉集 四 五四四）

のような恋の歌は『おもしろさうし』にはみられないのである。このことは『おもしろさうし』は宗教・呪術性と王権強化の要素が強く、抒情性の面では未発達であったことを物語っていると見えるのではないだろうか。

次に〈おなり〉が神として謡われる②「村落レベルでの〈おなり〉」と③「国家レベルでの〈おなり〉」に登場するおなり神の役割を見ていくと、

② 航海の安全を予祝するおなり神 → ② 造船を讃えるおなり神 →

③ 造門を讃える聞得大君 → ③ 王府と王を讃美する聞得大君

というように守護する対象が次第に広がっていくことがわかる。それも「おなりがゑけりを守護する」という基本は崩さずに。この基本は崩さないという姿勢は「ゑけりが世事、おなりが祭祀」という

社会構造が王と聞得大君のレベルまで押し上げられていることにも見られ、首里王国を築いた王と王府の物の活用の仕方は徹底していたようである。そんな王が、王権強化の面をとったのが、国王をおなり神が守護する形で讃美させ、そして国王が政治を掌握しおなり神である聞得大君が宗教一切を司って祭政を一致させることだったのである。

また②のオモロには、おなりである女性や神女に対応するゑけりの姿はあまり見られず、おなり神である人がそのオモロの主人公である印象を持つのだが、一方、③のオモロにはおなりである聞得大君またはそれ以下の神女に対応するゑけり、つまり国王の姿が必ずあり、まるで並列することが条件であるかのごとくである。そこではオモロの主人公は一見聞得大君のようであるが、実際は守護し讃美する対象の国王が主人公であり、これが『おもしろさうし』に見られるおなり神の最終的な姿であるように思われる。

おなり神信仰を考えていく上で大切なのは「誰のおなり神なのか」ということだろう。答えはもちろんゑけりなのであるが。というのも『おもしろさうし』におけるおなり神信仰の中で非常に興味深いのは、村落レベルで航海を予祝する際も、国家レベルで聞得大君が戦勝を予祝する際も、おなりはたった一人のゑけりにとつての神ではないところである。つまり、例えば航海予祝の際には、おなり神はゑけりの無事と同時に航海の安全も祈るのであるが、船頭の方は全員が同じ女性をおなり神として信仰したのではなく、それぞれの妹や恋人であるおなりを神としていたのである。それは国家レベルでも言え、聞得大君といういわば国を代表する最高位のおなり神がいても、彼女は王国の全男性を守護する神のではなく、ゑけりで

ある国王にとつてのおなり神でしかないのである。

また、おなりは決して船に乗ってまで祈ることはしないし、聞得大君が王に対して助言を与えたり、命令を下すような姿は全く見られず、どちらも外から祈るものとして描かれている。それはそれだけ「守護する」という考え方が強かったからなのだろうか、もしかしたら国王は宗教のもつ特異性をわかっていて、大君の方が力を増すことのないようにそういうオモロを詠ませたのでないか、とも私は思うのである。

最後に、琉球社会の人々はなぜおなり神を信仰したのだろうか。冒頭に琉球の固有信仰をいくつか挙げたが、これらに共通するのは一つの信仰としても確立している「ヘセヂ」(ヘスヘ)などの霊力信仰である。そしてこの霊力に共通するのは「不可思議さ」と「生命力」だと私は考える。例えば太陽は毎日必ず東から出て西に沈む。これは目に見えない不可思議な力であると同時に、あの輝きは生命力の象徴だったのでないか。火は物を燃やす見えない力を持ち、そしてその赤い炎は何か非常に強い力を感じさせる。

そんな中、男性にとつて最も身近で霊力ある生命力を感じさせる存在がおなりだったのではないか。豊かな体型や、子供を産み育てるといふ女性の機能そのものが生命力を感じさせ、そこに女性には生まれながらに霊力が宿っているという信仰が生まれ、次第に影響力を増して「おなり神信仰」となったのではないだろうか。

『おもしろさうし』には固有信仰をはじめ神を表すものが多数登場するが、「——神」と直接「神」を付けて謡われているものはおなり神くらいである。国王讃美・王権強化の側面ばかりをみてしまいがちであるが、オモロは唱えるもの・謡うものとしての神歌であり、

呪術性・宗教性の側面も忘れてはならない。これまで見てきたおなりの姿をそういう面も含めて考えていくと、おなり神信仰なしでは『おもしろさうし』はおろか、琉球王国も成立しなかったのではないか、というのは決して言い過ぎではないだろう。

『言語』「おもしろ鑑賞―琉球古謡の世界」中本正智・比嘉実・クリスード  
レイク著  
『沖繩の神話と民俗』「おもしろさうし」のふるさと考』鳥越憲三郎著（太  
平出版社）

（なべくら ゆきこ・一九九六年卒）

〔注〕

- (1) 外間守善著『南島の神歌 おもしろさうし』（中央公論社）
- (2) この辞書は「をなり」だが、ゼミのテキスト（外間守善『おもしろさうし』角川書店）では「おなり」が多く、論文中は「おなり」とした。
- (3) 一―三一の場合、一は巻を、三―は全体で何番のオモロかを表す。
- (4) 妹背の語義は「①妹と呼び背と呼ぶ間柄、親しい男女の関係②兄妹や姉弟の間柄③夫婦の間柄」『古語大辞典』（小学館）
- (5) 伊波普猷著『をなり神の島』（平凡社）
- (6) 琉歌は和歌・唐詩に対する琉歌。普通上句八八、下句八六の計三十六音からなる定型の短歌。謡う要素が強い。

〔参考文献〕

- 『おもしろさうし』外間守善著（角川書店）
- 『南島の神歌 おもしろさうし』外間守善著（中央公論社）
- 『南島文学 おもしろさうし、琉歌・組踊』外間守善編（角川書店）
- 『南島の抒情 琉歌』外間守善著（中央公論社）
- 『おもしろさうし辞典・総索引』仲原善忠・外間守善編（角川書店）
- 『沖繩古語大辞典』（角川書店）
- 『をなり神の島』伊波普猷著（平凡社）
- 『おもしろ新釈』仲原善忠著（琉球文教図書出版株式会社）
- 『おもしろさうし精華抄』おもしろ研究会著（ひるぎ社）
- 『解説おもしろさうし』池宮正治編（ひるぎ社）
- 『沖繩のノロの研究』宮城栄昌著（吉川弘文館）